

•ラヴェルのオペラ『子供と魔法』——坊やの心理的变化と音楽との関連性を中心に

ラヴェルのオペラ《子供と魔法》は、1920年から25年にかけて作られた。台本は女流作家コレット(Sidonie-Gabrielle Colette)が手がけ、1925年モンテ・カルロ劇場にて初演された。

《子供と魔法》の物語は、宿題をさぼっていたことがばれて『ママ』から叱られた『坊や』が、その腹いせに部屋中のものに八つ当たりすることから始まる。この『坊や』の残酷な行為に激怒した部屋中の“モノ”や“動物”達が人間のように動きまわったり話したりすることによって、自分達の怒りや悲しみを表明する。『坊や』はそれを通じて思いやりの心を持つまでに成長し、幕は閉じる。一幕二場で構成され、第一場は部屋の中、第二場は庭という設定となっている。

本論分では、各シーンの音楽的特徴を明らかにした上で、物語を通して成長していく『坊や』の成長の様子と音楽との結びつき、そしてその結果生まれる作品の統一感を検証していく。初めに『坊や』の心理的变化とその成長を明らかにし、それに沿ってピッチや強弱、旋律の流れ、テンポ、オーケストラがどのような趣向を凝らされているのかを見ていく。さらに、各シーンに登場する“モノ”や“動物”達とのやり取りや、その音楽から受ける『坊や』パートの影響を見ていく。

まず、『坊や』の心理的变化とその成長だが、部屋中の“モノ”に八つ当たりするという非常に気性の荒い精神状態から始まる。この『坊や』の精神状態をオーストリアの精神分析者メラニー・クライン(Melanie Klein)は、破壊主義、自己主義の精神と呼んでいる。この破壊主義の精神がピークに達したところで“モノ”たちの反逆が始まり、坊やは第一場において同情の心、その後第二場では自分の犯した罪の深さを知り、利他主義への精神をもつようになる。

『坊や』の破壊主義の精神の高まる様子を、ピッチの上昇、強弱、テンポ、オーケストラ陣の爆発音と言ったもので表現されている。第一場において始めて同情の心を持つのは、淡い恋心を寄せた絵本の『プリンセス』のシーンなのだが、それまでは人間のように振舞う“モノ”達に驚き、唾然とするだけで、『坊や』自身の自発的な感情は感じられない。『坊や』パートの旋律は極めて短く、存在しないシーンさえある。存在する旋律も登場人物たちの旋律の流れを決して壊さず、音楽や物語を進める主導権を『坊や』は一切持たない。

そして『プリンセス』のシーンで始めて『坊や』は自分の意見を述べる。愛しい『プリンセス』の嘆きを聞くことによって『坊や』の感情は高まり、全体においてもっとも高音域で歌われる。

第二場の利他主義への目覚めは、自分の犯した罪の深さに気づくことから始まる。この様子を徐々に低くなる『坊や』パートのピッチで表現されている。同時に、旋律の長さが徐々に短くなり、初めて自分の罪に恥じる気持ちを表している。

物語は『坊や』の心理的变化や成長にそって進んでいくのだが、怒り狂った登場人物達の心は、絶望や怒り、悲しみなど様々である。各シーンの音楽はジャズのリズムやメヌエット、ポリフォニーなど様々で、独立性を帯びている。実際、ラヴェルは各シーンや各登場人物の個性を強調するために番号オペラの形態をとっている。

ここで、「悪い子」を意味する「méchant」という単語に着目してみると、この単語が作品全体の統一感をもたらしていることが分かる。彼らは憎しみや怒りを込めてこの言葉を『坊や』に投げかけるのだが、その際大きな跳躍や増減音程、音価の変化などによって強調させる。それぞれの音楽が各登場人物の性格や感情を表現する中で、一貫して強調されるこの単語が登場するたびに、『坊や』の冒頭における過ちを思い出させる。また、怒りや悲しみなど登場人物たちの感情は様々なのだが、悪い行いをしていた『坊や』に対する共通の敵対心を感じさせる。

《子供と魔法》は、様々な音楽を用いられており、各シーンが独立している。しかし、『坊や』の心理的变化に沿って音楽を見てみると、それぞれのシーンの音楽を壊さないようにしながらも『坊や』の心理的变化や成長にあわせた音楽付けがされている。また、共通する登場人物たちの心情を作品の中でちりばめており、独立した中に、作品全体の統一感が存在する。